

論文提出者氏名 池田美紀子

池田美紀子氏の「夏目漱石一眼は識る東西の字」は、開化を是とした明治という時代に英文学者として自己形成を行い、さらに小説家として創作活動に転じた漱石夏目金之助とその作品を対象にする。漱石は、西洋として意識された文明とその文化の摂取に真摯に取り組みつつ、日本に足場を置く人間としての自己を強く意識した文学者であった。本論文は、そのような漱石の知的経歴と知的視野を描き出し、漱石の作品が持つ豊かな文学的コンテクストを東西の文学・芸術に探った比較文学研究である。副題の「眼は識る東西の字」は「眼識東西字心抱古今憂」にはじまる漱石自身の五言古詩の第一句から取られたもので、本論文が論及する漱石という知識人が置かれた時代状況と知的環境をよく要約し得ている。

本論文は、五部に分かれる全九章の本文、および「序章」と「付論」からなる。以下、論文の構成にしたがって、内容の概略を記す。

序章「眼は識る東西の字」は、漢学の素養の上に英文学の教養を積んだ夏目漱石の知的閱歴を確認した上で、東西両洋を否応なく意識し、創作を通じてやがて文明批評に踏み込んでゆく軌跡を辿り、夏目漱石を比較文学的に論じることの意味を改めて確認する。

第一章「漱石と世紀末の女性たち—ヒロインの肖像」は、イギリス・ヨーロッパのデカダンス芸術の潮流、及びラファエル前派の芸術運動を意識した漱石が、「残酷な女神」「宿命の女」といった文学的形象をいかに自作に生かすにいたったかを論じる。ロンドンにおける漱石の観劇、観画体験に具体的に言及し、『三四郎』の美彌子の造形への道筋を示す。

第二章「漱石の「英詩」から「薙露行」へ」は、広く英詩に学んだ漱石の英語による詩および新体詩に生と夢とがいかに描出されるかを、J・キーツ、E・A・ポーらとの比較を通じて分析し、「薙露行」に登場するエレーンと堇のイメージとの結びつきなどに言及する。

第三章「漱石のポー論」は、英文学者として早い時期からポーの想像力に着目した漱石が、精神の二面性という点でポーと共通点を持つことを指摘し、次章の議論へとつなげる。

第四章「二人であることの病い—漱石の『こゝろ』とポー」は、『彼岸過迄』、『行人』、『こゝろ』の「後期三部作」を特徴づける複数視点による二重の語り、人間心理の不可思議さに迫るための方法であると確認する。その上で、このような物語の構造が、人間の罪と良心の葛藤を描くポーの短編「ウィリアム・ウィルソン」の語りの構造に似ることを指摘する。

第五章「暗黒への旅—『坑夫』の成立」は、ポーの短編「陥穽と振子」が『坑夫』に及ぼした影響の可能性を論じる。両者は、地下牢と坑道という暗闇を背景に朦朧とした人間の意識が覚醒する過程を描くとするのである。

第六章「漱石における「個人」と「国家」」は、漱石の講演、談話等に表れる国家観、戦争観に言及しつつ、日露戦争を背景として男女相愛を描く「趣味の遺伝」がD・G・ロセッティの「仲裁のアグネス」に想を得ていると指摘する。

第七章「遅れて来た死—漱石の『こゝろ』と鷗外「興津彌五右衛門の遺書」」は、『こゝろ』に語られる乃木希典の自刃の意味について、同じ事件を執筆の動機とする森鷗外「興

津彌五右衛門の遺書」と対照させつつ論じる。

第八章「迷宮都市の光と闇—『彼岸過迄』」は、迷宮としての東京を舞台とする『彼岸過迄』が大都会を描く文学の系譜に位置づけられること、都会の迷路と人間の内面との対比においてポー「群衆の人」、ドストエフスキー『地下室の手記』等と併せ読むことによりその意味が明確になることを論じる。

第九章「ハーン・転生・『夢十夜』第一夜」は、漱石とラフカディオ・ハーンとが、T・ゴーチェ「クラリモンド」の受容という点で接点を持ち、『夢十夜』第一夜がハーンの怪談との比較において論じうることを示す。

第十章「『明暗』—ポリフォニーの世界と他者」は、他者としての女性、謎として女性を描くことが『行人』、『道草』、『明暗』の課題であったことを確認しつつ、『明暗』の読みに際してはH・ジェームズの『黄金の盃』を補助線としうること、「偶然」、「突飛」等がキーワードとなることを論じる。

第十一章「漱石の「風景庭園」論とピクチャレスク詩学—ポープ、ターナー、ワーズワース」は、イギリス滞在中多くの美術作品に接した漱石における「ピクチャレスク」美学の受容に触れる。漱石がA・ポープ、W・ターナー、W・ワーズワースらに学びつつ、その美学を『永日小品』などの創作に生かしていることが指摘される。

第十二章「夢想の「庭」—漱石、蕪村、王維」では、前章で論じられるピクチャレスクの美学に関わるものとして、王維の輞川荘をめぐる美意識が蕪村に受け継がれ、漱石へと流れ込んでゆくありさまが跡づけられる。付論「荒野からピクチャレスクへ—ポー、ホーソン、ジェイムズと「理想の風景」」は、このピクチャレスクの美学を広く英米文学の文脈において確認したものである。

池田氏の論述は各章とも多岐にわたる。以上の概略はその比較文学的視野の広がりや強調するかたちで記した。いずれの章においても、漱石のテキストの読解にあたっては多様な文学・芸術作品が参照されており、その記述は池田氏の豊かな教養と学識を裏書きしている。漱石とポーとの関わりに関する指摘など、比較文学研究としての功績は大きいと認められる。

本論文は、池田氏の約三十年に及ぶ研究を集約したものである。そのため、雑誌初出時の論考においては創見とされたものに、現在は広く漱石研究者に共有される解釈が含まれるという事態が生じている。漱石研究の進展に沿うかたちで氏の論述がより丁寧に行われていたならば、池田氏の研究の漱石研究史上における意義もより明確になったであろうとの意見が、審査委員からは寄せられた。

このほか、審査委員からは「付論」の記述は漱石の研究の文脈からかなり離れるので、本論文からは切り離すべきではとの意見もあった。一方、審査委員会の場で個々の記述をめぐる実りある学問的対話が行われたことも確認しておかなくてはならない。

本論文は既に本として刊行されたものであるが、一部に明らかな誤記が見られることは残念である。これは刷りを改める際に訂正されるべきであろう。ただし、これは本論文のあげた学術的成果を本質的に損なうものではない。

以上の判断により、本審査委員会は、池田美紀子氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。